

# 平成 27 年度「大学入門ゼミ」実施報告

佐藤慶太 (大学教育基盤センター准教授)  
松下幸司 (教育学部准教授)  
三宅岳史 (教育学部准教授)  
佐川友佳子 (法学部准教授)  
持田めぐみ (経済学部准教授)  
宮下信泉 (医学部准教授)  
宮川勇人 (工学部准教授)  
末吉紀行 (農学部准教授)

## 1. はじめに

本稿は、平成 27 年度「大学入門ゼミ」の実施状況報告である。「大学入門ゼミ」立ち上げの経緯、および過去 4 年の実施状況については、佐藤 (2011)、佐藤ほか (2012、2013、2014、2015) を参照されたい。まず本年度の大学教育基盤センター (以下、大教センター) の取り組み内容、および本年度実施において特記すべき事項 (第 2 節) を確認する。次いで各学部の実施状況を報告し (第 3 節)、これを踏まえた実施部会の議論をまとめる (第 4 節)。第 3 節を除く箇所の文責は、佐藤慶太が負う。

## 2. 今年度の大教センターの取り組み

「大学入門ゼミ」に関する取組は、主に各学部の実施担当者の代表と大教センターの教員から構成される「大学入門ゼミ実施部会」 (以下、実施部会) によって行われる。今年度の実施部会委員は、佐藤慶太 (大学教育基盤センター：実施部会長)、葛城浩一 (同)、西本佳代 (同)、松下幸司 (教育学部学校教育教員養成課程)、三宅岳史 (教育学部人間発達環境課程)、佐川友佳子 (法学部)、持田めぐみ (経済学部)、宮下信泉 (医学部)、宮川勇人 (工学部)、末吉紀行 (農学部) の 10 名である。大教センターが平成 27 年度の「大学入門ゼミ」に関して、行ったのは、次の 7 つで、①、⑥、⑦を除く取組の企画を実施部会が担っている。

- ①「大学入門ゼミ」担当者向け FD (平成 27 年 3 月：計 3 コマ)
- ②授業公開 (末吉先生：農学部、三宅先生：教育学部)
- ③受講生対象のアンケート (以下、受講生アンケート)
- ④担当者教員対象のアンケート (以下、教員アンケート)
- ⑤実施状況の報告、検討

⑥ PBL についての FD（平成 27 年 11 月：講師担当石原先生）

⑦ PBL についての体験型 FD（平成 26 年 12 月：全学 FD 分科会。講師担当石原先生）

①の「大学入門ゼミ」担当者向け FD は、これまで 5 コマ（情報整理の方法、レポートの書き方、プレゼンテーションの方法、日本語技法、協同学習の技法）行われてきたが、共通コンテンツを取り扱った FD の参加者が減ってきたことを考慮して、情報整理の方法、レポートの書き方、プレゼンテーションの方法を 1 回に圧縮し（「アカデミックスキルの教え方」というタイトルで実施）計 3 コマの実施となった。「アカデミックスキルの教え方」では、中心となるワークの体験を軸に、ポイントを絞ってまとめた。受講者の反応もよかったので、次回もこの形式を踏襲する予定である。

②の授業公開では、実施部会委員である末吉先生、三宅先生に担当していただいた。末吉先生の授業では、共通コンテンツの学習を踏まえた学生プレゼンの様子を、三宅先生の授業では、日本語技法を扱った回を見せていただいた。個人的な所見であるが、前者では、学生のプレゼンを学生が評価する仕組みが参考になったし、後者では、複数の教員による授業運営の一コマを見ることができ、学ぶところが多かった。

③の受講者アンケートは教員の授業改善を主目的としたもので、全学共通コンテンツを学んでよかった点（自由記述）、改善すべき点（自由記述）を質問項目としている。

④の教員アンケートは、実施状況の確認、大教センターのサポート体制改善のために行われるもので、全学共通コンテンツを指導して考えたこと・感じたこと、全学共通コンテンツを指導するにあたって凝らした工夫、『大学入門ゼミハンドブック』についての意見、「大学入門ゼミ」の教育効果についての意見、が質問項目となる。なお担当者が集まって反省会を行っている学部では、教員アンケートは行われぬ。⑤の報告、検討については第 4 節で述べる。

⑥、⑦は、地域連携戦略室と連携して行われた取り組みである。来年度より、文部科学省の大学改革推進事業である「地（知）の拠点整備事業」（略称 COC）および「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（略称 COC +）との関連で、「大学入門ゼミ」に初級 PBL（Problem Based Learning/ Program Based Learning）を導入するということが決まった。そもそも PBL とは何か、ということについての共通理解も確立していないため、地域連携戦略室の石原秀則先生を講師に迎えて、FD を開催することとなったわけである。同じ理由で、全学 FD 分科会では例年授業公開をしていただいた先生に実践報告をお願いしていたが、今年は石原先生を講師に迎えて PBL をテーマに体験型のワークショップを行うこととなった。この FD の詳細については、「全学共通教育の平成 28 年度実施に向けた研修会（FD）報告」（本誌 131 - 138 頁）を参照されたい。

### 3. 各学部の実施状況

本節は、実施部会委員による各学部の実施報告によって構成される（以下の実施報告では、項目の立て方等で統一されていないところがあるが、とくに修正しないままにしている）。まず各学部の受講者数、担当教員数およびクラス数を確認する。

表 1 各学部の受講者数と担当教員数

学部	一年次生現員	担当教員数とクラス数
教育（学校教育教員養成課程）	161	9（7クラス）
教育（人間発達環境課程）	40	5（2クラス）
法	160	8（8クラス）
経済	297	19（19クラス）
医	173	7（6クラス）
工	276	13（13クラス）
農	154	6（6クラス）

注：教育学部人間発達環境課程は、昨年度授業を担当した教員を全体のコーディネーターとして配置している。

### 3-1. 教育学部学校教育教員養成課程

#### (1) 実施の概要

平成 27 年度は 1 年次学生が 30 名増えたことに伴い、7 クラス編成（1 クラス 23 名）で実施した。全学共通コンテンツについては 161 名を 2 クラスに分けて実施した。本学部学校教育教員養成課程における平成 27 年度「大学入門ゼミ」のスケジュールは、表 2（次頁）のとおりである。

本学部学校教育教員養成課程における「大学入門ゼミ」の特徴として、「二十四の瞳」との出会い学習を組み込んでいることを挙げることができる。事前指導の際、学生に挙手を求めたところ、「二十四の瞳」を詳しく知る学生はほとんどいないようであったが、県教委の採用募集ポスターやパンフレットなどに幅広く活用されており、いまだ包含する価値は大きい。本授業の一部に組み込んでいる小豆島での一日研修やその事前指導を通して、未来の教師を目指す一年次生に、教師への憧れや教育への情熱を「二十四の瞳」との出会いを通じて醸成させたいと考えた。本活動は、地域に根ざした取り組みであるとともに、地域に誇りを持って活動する学生を育成することにもつながると考える。

#### (2) 受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

平成 26 年度の学生アンケートに、レポートの書き方をもっと早く実施してもらいたいとの希望が多かったことから、今年度（平成 27 年度）は昨年度より 1 ヶ月ほど早く実施した。レポートの書き方に関して、学生アンケートには「大学に入り、レポートを書く機会が格段に増えたが、書き方が分からず困っていたので、…（中略）…とても助かった」「今後多く必要になってくるので、教えてもらってよかった」「早めにしていただき良かったと思う」「高校のときでは学べなかったレベルのものが学べた」など、高校生までとは異なる“大学生としての学び方”のスキルアップの基礎を培うことができたと思われる。

加えて、学生からは「実際にやる場面があったので分かりやすかった」「実際にすることで、自分なりにしっかり考えることができたと思う」「プレゼンテーションで、自分たちができるかぎりがんばったものより、もっと分かりやすく工夫した班があって刺激を受けた」などの感想も複数寄せられた。共通コンテンツの内容を、ただ一斉講義により伝えるだけでなく、各担当教員が指導法を工夫し、「事例について実際に考えてみる」「ペアやグループごとに話し合う・伝え合う」といった、演習形式を取り入れて指導した成果として捉えられる。併せて、「大学入門ゼミ」全体の総括として「学んだことを整理する→発表原稿にまとめる→プレゼンテーションを行う」という学習活動を含めることに

より、共通コンテンツとして学んだことを、実際に自らの学びに生かすプロセスを授業内で体験できたことも、学生の学習内容への達成感・充足感をより高めることにつながったと考える。

表2 教育学部学校教員養成課程「大学入門ゼミ」のスケジュール

回	月・日（曜日）	内 容
1	4月13日（月）	オリエンテーション・授業説明 学生憲章と大学生としての自覚 [全体指導]
2	4月20日（月）	小豆島一日研修 事前指導
3	4月27日（月）	【共通コンテンツ】情報整理の方法
4	5月7日（水）	【共通コンテンツ】レポートの書き方
5	5月9日 or 10日	小豆島一日研修「二十四の瞳」出会い学習 [7クラスを2班に分け、日帰りで実施]
6	5月18日（月）	【共通コンテンツ】日本語技法
7	5月25日（月）	学校参観事前指導 [全体指導]
8	6月1日（月）	小学校参観（附高小・附坂小）
9	6月8日（月）	小学校参観 振り返り [クラスごと]
10	6月15日（月）	【共通コンテンツ】プレゼンテーションの技法
11	6月22日（月）	幼稚園・中学校参観（附幼・附幼高松園舎・附高中・附坂中）
12	6月29日（月）	幼稚園・中学校参観 振り返り [クラスごと]
13	7月6日（月）	「大学入門ゼミで学んだこと」発表準備 [クラスごと]
14	7月13日（月）	学校教育入門 授業の基礎基本 [全体指導]
15	7月27日（月）	「大学入門ゼミで学んだこと」発表・まとめ

### （3）改善すべき点等

日本語技法については、学生から「少し難しかったところはもう少し詳しくしたほうがよいと思う」「内容が多く、）時間が足りず駆け足になっていた」などの意見が寄せられている。また、授業担当教員の事後アンケートにおいても「実際に本学の学生が書いたものを事例として出さないと、『文章技法の一般論』になってしまう」「一般論を学ぶことと、体系的な事象を学びながらそれをレポートにすることは、かなり異なったことのように思える」などの意見が寄せられた。今後、大学生として必要な内容の精選、本学学生の事例を挙げるなど授業法の工夫、ならびに、全学共通コンテンツ相互の連続性を持たせるなどの授業実施上の工夫が必要だと思われる。

## 3-2. 教育学部人間発達環境課程

### （1）実施の概要

今年度は人間発達環境課程の学生定員が70名から40名に変更したため、1クラス減少した。42名の学生に対して、2クラス4名の担任とコーディネーター1名で入門ゼミを実施した。内容は、最後にグループ発表を行うために課題を教員の用意したトピックの中から選択して、要約や引用、レポートの書き方やプレゼンの仕方などのアカデミックスキルを途中で学ぶという形式にした。

今年の新たな試みは、1. ゲストスピーカーを呼んだ。2. グループ発表の課題について最初に読む文献を指定した。3. 教科書を指定して全員に購入してもらった、の三点。

## (2) 受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

- ・解説の時間が長いのでワークなどの実践を早めてほしい→教えないと実践できない所があるので、なかなか短縮化は難しい。反転授業のやり方などはあるが、今年是对応できなかった。大学によっては動画をアップしている所もある。
- ・レポートの書き方は時期的に早くしてほしいという意見があった。／一番最初にレポートの書き方をしてほしいという意見もあった。→スケジュールのなかでかなり早くしている。ノートやメールの書き方よりもレポートの書き方を早くした方がよいのか検討する。
- ・レポートの書き方については、分量を少なくしてほしいという意見と丁寧に教えてほしいという両極的な意見があった。→知りたければ教科書を読んでという指導はある。

## (3) 改善すべき点等

合宿の活動について今年は、グループ発表とリンクさせたので、内容的に充実した。ただし、その合宿で発表するテーマから、グループ発表のテーマを決めるときに、学生が行いたいテーマに集中してしまったので、調整に時間がかかってしまった。

かなり抽象的なテーマを選んだ班では、材料集めるのが大変であった。自由度が高くて酷な面があった。先行研究のリストを示すなどをテーマ提示した教員がしてもよいのではないか。班によって収集する資料の質も変わっていた。

資料も今回は1冊示したが、2～3冊あるとよいのではないか。しかし、毎年、担任が変わるので準備する方も大変。テーマは毎年変えているが、蓄積して同じテーマを使うなどするやり方もあるかもしれない。

外部スピーカーを呼ぶタイミングはこれでよかったのか。後期の1年生ゼミでもよかったかもしれない。引きこもりの話など、研究テーマのリンクなどは見られた。そのような世界があることのリアリティを感じることができた。

エッセイ集みたいな資料を選んだ学生もいた。その場合は背景知識がいる。データをみてもうままでいかないと学びが深まらない。

## 3-3. 法学部

### (1) 実施の概要

クラス分け、担当者と各テーマについて 全学生 160 名を 8 クラスに分けて実施した。教員はランダムに年ごとに割り当てられ（今年度より CA（キャンパスアドバイザー）制度と連動させており、入門ゼミ担当教員が各入門ゼミの学生の 1～2 年次の CA となる）、共通コンテンツと担当教員ごとに設定されたテーマで 15 回実施した。各テーマと担当教員は以下の通りである。

「憲法判例研究」（小澤）

「アカデミックスキルを使ってみよう」（春日川）

「社会現象の捉え方」（金）

「少年非行と法」（佐川）

「アカデミックスキルを学ぶ」（堤）

「法律から日常を考える」(前原)

「新聞記事等からみる社会・地域の課題(自治動向研究)」(三野)

「法からみる世界」(八並)

共通コンテンツの実施状況 今年度の「大学入門ゼミ」についても、昨年度のアンケート等を踏まえ、共通コンテンツ・ガイドラインに沿って各教員が個別に講義を行う形を基本とした。テキストに関しても、『大学入門ゼミハンドブック』を参考に各教員がそれぞれ内容を準備して行うようにした。それ以外で全クラス共通で行ったものとしては、昨年同様、法学部で発生した不祥事の再発予防のために「大学入門ゼミ」全受講生全員を対象として心理カウンセラーによる講演会を実施し、全員にレポートの提出を義務づけた。次年度以降も、同様の講演会を「大学入門ゼミ」の時間の一部を利用して行うことを教務委員会で検討中である。

また、図書館・法学部資料室見学については、施設のキャパシティの問題から各時間2クラスずつに分散してこれを行った。法学部という学部の特性上、判例や資料の探し方を知っておくことは重要なので、来年度以降も継続して実施する予定である。

## (2) 受講生アンケート(共通コンテンツアンケート)結果についての所見

共通コンテンツを利用しているとはいえ、教員間の授業内容に違いがあるが、学生が主体的に取り組むような形での授業は概して評価が高かった。メールの書き方など、意外に基本的なことが出来ない学生が散見されたので、その時々学生のレベルに合わせ、実践しておくことが重要だと感じた。

また、情報整理の方法について、実際にビデオや新聞を見ながら内容を把握し、要約する、というような方式を採った教員がおり、これについては学生の評価も高かったので、一つの方法として参考になるのではないかとと思われる。こうした評価から、一方的に教員の話聞くのではなく、少人数教育という特質を生かして、できる限り学生が何かをした上で(レポートを書く、情報を整理し、纏める等)、それに対して教員側がレスポンスする(評価する、コメントする等)と、学生の満足度も高いように思う。特に、レポートの書き方については、こちらも驚くほど前提知識がない学生が散見されるので、一度ならず、何度かレポートを書く機会を与えた方が良いのではないと思う。しかも、この授業だけで終わってしまうのではなく、今後の学部の少人数教育でも文章を継続的に書かせる習慣を付けておくことが必要だと感じた。

しかしながら、報告者自身も入門ゼミを担当していて感じたことだが、あまりに基礎的な知識(ノートを取り方等)を授業の枠組みを使って教授することは学力の高い層にはむしろ大学の授業に対する興味を失わせるようなマイナスの効果があるので(「日本語技法は高校などの国語教育で学んだことも多々あったので、無意味な部分も多かった」「わざわざ実習の時間を設けるほどのものでもない」等の意見があった)あくまで知的好奇心に訴えかけるような形で学生の積極的な取り組みを促す必要があると感じた。その意味では、上のビデオや新聞を使った手法は参考になるし、また、レポート等を課して文章力を磨きつつ、自分の力の足りないところを自覚してもらうことは、大学で学ぶ姿勢を身につけるにあたって、効果的なのではないかと感じた。また、グループワークをしたゼミは、他の学生との協力やプレゼンの練習が出来て良かった、という意見があった。こうした経験は、他の学

生との交流、友人作りのきっかけになるので大学生活の充実という意味でも効果があったようである。またプレゼンは、資料収集や日本語技法の実践の場でもあるので、学生の自信にも繋がり、非常に有意義だったようである。

### (3) 改善すべき点等

レポートの具体的な書き方がわからなかった、という意見があった。「こういうレポートが望ましい」と抽象的に言われても、学生側にそれを理解し、実践できる層は、教員が思っているほど多くはないようなので、この点については詳細な具体例を示す、あるいはレポートを何回も書かせ、添削する、といった改善方法が考えられる。

また、プレゼンの時間がもっと欲しかった、という意見がかなりあった。この点、いきなりプレゼンすることになるのはハードルが高いので、一度参考になるようなものを見たかったという意見もあった。プレゼンはグループワークとして実施したゼミが多かったようであるが、そうではないゼミもあったようである。またパワーポイントの使用／不使用についてもゼミによって対応が異なった。こういったバラつきを是とするのか、あるいは学部全体で共通化するののかについては検討を要する。こういった点については次年度以降に引き継ぎ、改善していきたいと考えている。

## 3-4. 経済学部

### (1) 実施の概要

今年度の「大学入門ゼミ」の開講数は「18」（昨年 15、一昨年 25）、1 クラス当たりの受講人数は 15 - 19 名程度であった。全クラス合わせて 4 名の 2 年次生が含まれている。

学部として今年度から初めて、全クラス（受講生全員）合同でのガイダンス授業を 4 月に 1 度実施した。混乱を避けるため、初回の「大学入門ゼミ」は全クラス休講の措置となった。

授業内容については、全クラス必ず「共通コンテンツ」を扱うこと以外は担当教員の裁量に任されており、「共通コンテンツ」を授業内でどのように扱うか、その方法や比重についても各教員に任されているため、学科やクラスごとに実施形態は様々であると思われる。

### (2) 受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

4 つの共通コンテンツの内、1 つ以上を選んで良かったところを述べる形式に対して、「レポートの書き方」や「プレゼンテーションの方法」についての評価が高い。特に、レポートの作成については未経験の新生がほとんどであるため、1 年生前期の期末試験よりも前の段階で「レポートの書き方」を学ぶことは、実用性も高いものと思われる。レポートの書き方同様、正しいメールの書き方についても早い時期に学ぶことへの評価が高かった。外国人教員が担当するクラスからは、「日本語技法」の内容に対して数点要望も出ているようである。

### (3) 改善すべき点等

教員アンケートから、『大学入門ゼミハンドブック』をファイル媒体で学生もダウンロードできたり、実際作業できるワークアイテムがあると助かる」という指摘があった。

### 3-5. 医学部

#### (1) 実施の概要

実施の概要 全学生数 170 名を学生に対する希望調査により 6 クラスに分け、教員 7 名で前期に行った。教員アンケートは 2 名、学生用アンケートは 94 名の回答であった。

共通コンテンツの実施状況 医学部に関しては、各クラスの担当教員が全 15 コマの講義時間内に実施した。(A)「共通コンテンツ中心の講義・演習とは別に、教員の専門性に基づく独自のテーマの講義・実習・共通コンテンツの趣旨に沿った演習等を実施した形式」のクラス(中村ゼミ、宮下ゼミ、峠ゼミ、大西・越田ゼミ)と、(B)「全時間内に適宜、全学共通コンテンツの内容を紹介・実施」したクラス(久富ゼミ、西屋ゼミ)の両方の形式で行われた。

上記の内容についての実施形態 全学共通コンテンツに関しては、それぞれの教員の判断によりシラバスに従い実施した。ハンドブックおよび提供されたパワーポイントを参考に、学生参加型(学生によるプレゼン、実技、グループワーク等)のゼミが行われた。教員により、「全学共通コンテンツ」に関連する内容の動画の視聴、科学論文の引用文献の書式・学内インターネット使用方法・文献検索の方法の解説等を取り入れている。

また、各々のゼミにおいて、「授業の予習用動画のインターネット視聴による反転授業を取り入れ、深いアクティブ・ラーニングとなるようにした」、「医学部図書館員職員による蔵書検索システム等の医学部図書館の使い方の紹介を行った」、「共通コンテンツの発展形として、PBL (Problem Based Learning) および医療面接のトライアル、コミュニケーション・アサーション・ファシリテーションスキルについての演習を行った」、「病院見学における患者との対話による日本語技法(スキル)の活用をおこなった」といった工夫の報告があった。

全学共通コンテンツの部分の評価方法について それぞれのゼミでシラバスに従い、教員の判断により成績評価の評価を行った。

共通コンテンツ以外の部分の実施状況 クラスごとに教員の専門性に即し、独自の下記のテーマで講義を行った。

- 「現代の脳神経科学」(中村ゼミ)
- 「これからの君たちの将来を考えていこう」(西屋ゼミ)
- 「医療分野での X 線と放射線」(久富ゼミ)
- 「生物多様性と実験医学」(宮下ゼミ)
- 「患者との対話から学ぶこと」(峠ゼミ)
- 「対人援助職に求められるスキル」(大西・越田ゼミ)

#### (2) 学生アンケート(共通コンテンツアンケート)結果についての所見

「プレゼンテーションの方法」、「レポートの書き方」に関して、特に学生の評価が高かった。「プレゼンテーションの方法」では、パワーポイントを実際を使って発表(プレゼン)を体験でき、さらに



教員により評価が行われた点、コミュニケーションの取り方についてもスキル演習等で学べた点が評価されている。

「レポートの書き方」については、具体的な書き方・注意点・参考文献の利用および引用法を学べた点に関して評価が良かった。また実際に他の授業でレポート提出の機会があったため役に立ったという意見が多かった。

「情報整理の方法」では、実際の講義に際してのノートのまとめ方、レジュメ（配布資料）の整理に役立った、論文の検索法に対する知識を得ることができたとの意見が多い。

改善すべき点として、具体的なレポート提出・添削指導がないと実際にスキル取得が難しいとの意見が学生より出ている。共通コンテンツに関するスキル教育全般について具体的かつ十分な演習を行うには絶対的な時間が足りない、という意見もある。

### （3）改善すべき点（担当教員からのコメント）等

- ・医学部においてレポートの書き方は各々の授業で指導すれば良い。
- ・「大学入門ゼミ」をどう評価するかについて議論がない。特にアクティブ・ラーニングを行う場合、どのような評価を行うか具体例を示してほしい。
- ・日本語技法を学ぶ「具体的方法論」を構築する必要がある。

## 3-6. 工学部

### （1）実施の概要

工学部においては例年、新入生の CA 教員（13 名）がそれぞれのクラスを担当しており本年についてもそれを踏襲した（CA 教員とは、割り当てられた 20 名程度の 1 年次生を、3 年次の研究室配属までサポートする教員のこと）。またスケジュールについても例年とほぼ同様に前半に学部共通コンテンツと全学共通コンテンツを行い、後半に学科ごとのコンテンツを実施した（表 3 参照）。

特に、学部共通コンテンツの 2 回を割いて外部講師による安全講習と大学生活について講義していただいた。また、後半の学科ごとのグループワークはそれぞれの CA に裁量に任せ内容を決定し実施した。例えば、材料創造工学科では「科学技術と社会問題」「留学するならどこへ行くか」「工業材料とその応用」などといったテーマについて 4～5 人のグループで調査し発表を行うという内容や、「実験レポート」「モラル教育」について講義するという内容を行っている。これらについては学生アンケートでも好評が得られている。

### （2）受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

特に多くの意見が見られた内容項目では、「日本語技法」「レポートの書き方」「プレゼンテーションのやり方」である。これらは、その後の大学授業において役立つと考えられていることから好意見が多かった。「日本語技法」については 2 回の授業では少ないだとか、さらに詳しく教わりたいという意見が見られ、「プレゼンテーションのやり方」についても実際の実践で「失敗した」「うまくしゃべれなかった」という意見が多く、複数回の発表機会があると良かったのかもしれない。これらについてはスケジュールの内容配分を今後検討する必要がある。

表3 工学部「大学入門ゼミ」のスケジュール

回数	日付	授業内容
1	4月 8日	①ガイダンス (学科ごと)
		②学科施設の見学 (CA 班ごと)
2	4月 15日	安全講習 (4学科全体)
3	4月 22日	大学生活 (4学科全体) ~保健管理
4	5月 1日	情報管理 (学科ごと)
5	5月 13日	レポートの書き方 (学科ごと)
6	5月 20日	日本語技法その1 (学科ごと)
7	5月 27日	日本語技法その2 (学科ごと)
8	6月 3日	プレゼンテーション法 (学科ごと)
9	6月 10日	モラル教育 (学科ごと)
10	6月 17日	グループワーク① (CA 班ごと)
11	6月 24日	
12	7月 1日	
13	7月 8日	グループワーク② (学科ごと)
14	7月 15日	
15	7月 22日	

### (3) 改善すべき点等

学生アンケートからは概ね好評の内容が多く、さらに学びたいという意見が散見されていることから、より時間をかけて丁寧に指導することが必要と思われる。その意味では、コマ数の増加も検討すべきかもしれない。また一方で、工学部ではCAが本授業担当となるため、毎年担当が入れ替わる。つまり教員側のスキルとしては成熟を期待するのが難しいため、内容やその指導熟練度も個々の教員に依存していることがやや問題ではあり、クラスや学年による内容の不均衡を生じる可能性があるため、これについては何らかの方策（例えばFDや年度引き継ぎの充実化など）が求められる。内容（全学コンテンツ、学科コンテンツ、CAごとのコンテンツ）についても、学生アンケートで指摘されている「日本語教育」「レポートの書き方」「プレゼンテーションのやり方」を可能ならば重点を置いて、回・コマの調整を検討する必要があると思われる。

## 3-7. 農学部

### (1) 実施の概要

共通コンテンツの実施状況 これまでと同様に、共通コンテンツは前半部分に集中し、後半部分は各クラスで独自の内容とした。共通コンテンツに関する講義は合同では行わず、昨年度までの全学共通コンテンツの実施内容と問題点を踏まえ、各担当者が工夫を凝らしてクラス別に実施した。また、全学共通コンテンツの中では全てのクラスで図書館見学を取り入れ、図書館職員の方に各クラス60分程度の時間を割いて説明と案内をお願いした。

学部共通コンテンツの実施状況 4月の講義1週目に1泊2日の合宿形式で屋島少年自然の家において実施した。「大学入門ゼミ」の講義担当者ではなく、1年生のアドバイザー教員が担当し、TAのサポートを得つつグループワーク（テーマを決めて議論、大学生活についてTAとの質疑応答など）

を行った。

担当者間の連携の仕方 27 年度から講義担当者が 2 年任期で交代することとなったが、6 名の担当者のうち 2 名が引き続き「大学入門ゼミ」を受け持つこととした。担当者全員で 3 月に事前打ち合わせを行って、前年度から引き続き担当する教員が講義のモデルケースを示すとともに、前年度までの問題点や改善点などの情報を共有した。

共通コンテンツの部分の評価方法について 共通コンテンツ部分だけを独立して評価することはせず、共通コンテンツで教えた内容が以後の学生達によるプレゼンテーションやレポートに反映されているかどうかを評価した。

共通コンテンツ以外の部分の実施状況 概ね 7 回程度を各講義題目に沿った形で学生が選んだテーマに関するプレゼンテーションに充て、活発な討論を促した。教員は、学生達の発表・討論がスムーズに進むよう、座長のような役割を果たした。

## (2) 受講生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

レポートの書き方についてクラスによって、あるいはクラス内でも評価が分かれており、「情報リテラシーでも教わるので必要ない」という学生がいる一方で、「もっとレポートに割く時間を増やしてほしい」という意見もある。また、特定のクラスでは「学んだことはないに等しい」、「後輩が入ってくるとしたらこのゼミはオススメしない」、「先生を変えると全てが解決すると思う」などの厳しい意見が見られた。アンケート結果を各担当教員にどのようにフィードバックし、それぞれの教員が今後の講義のあり方にどう生かすかが、今後の検討課題であると思われた。

## 4. 実施部会での議論と今年度実施を踏まえた改善

上述のように本年度は COC、COC + への対応という課題があったため、通常のカンファレンスとは別に、緊急に部会を招集するということがあった。まずこのことについて述べておこう。

今年度、調査研究部では、COC、COC + の取組みとの関連で、全学共通教育において「地域」をテーマにした授業の必修化をいかに行うか、初級 PBL をいかに行うかという二つの課題が立てられた（行うことは前提）。議論の過程で、「地域」をテーマとした授業を「大学入門ゼミ」で、という案も出たが、結局は、地域をテーマとした授業群、主題 C（科目自体は 28 年度からスタート）において、平成 29 年度から必修化するという方向性で検討することに決まった。一方、初級 PBL の必修化は、「大学入門ゼミ」が引き受けることとなった。これは全く新しい科目への衣替えということではない。「大学入門ゼミ」は、そもそも「21 世紀社会の諸問題に対する探究能力」を育成するという役割を担われているので、次年度以降この役割を明確化するという形で、当該の課題に対応することとなったのである。ただし、実際に初級 PBL を実施した後で、成果確認のためのレポートをまとめる必要があるため、次年度以降は、これが新たに加わる要素といえる。これらの議論は、主に調査研究部を舞台に

展開されたが、「実施部会で議論を行わないままで審議を進めるのはまずい」という実施部会委員の意見もあり、審議の途中で実施部会を開催、そこでの意見を取りまとめて調査研究部で報告、ということが行われた。結果的に、実施部会における話し合いと齟齬のない形で全学共通教育の方向性が定まり、緊急招集の意義あったと思われる。また、実施部会委員から自発的に議論の必要性を訴える声が出てきたことは、非常に頼もしいことであった。

通常開催の実施部会では、報告書のあり方と成績評価方法について議論が行われた。毎年作成している「大学入門ゼミ」の報告書は、ニーズや満足度についての選択式アンケートを平成25年にとりやめたこと、この科目が安定的運用の段階に入ってきたということもあり、紀要に載せる意義が不明確になってきている。今年度は、実施部会委員の要望もあり、紀要への掲載は続くこととなったが、次年度は、内容のレベルをこのままにするならば、Web上での公開にする、紀要に掲載するとすれば記述のレベルを上げる、という結論に至った（どちらを選択するかは次年度の初めに決定する）。後者の場合、例えば、COC+との関連で、各学部のPBL事例をまとめた内容にする、ということになるのか。

成績評価方法について言うと、「大学入門ゼミ」は、必修、学部によっては選択の余地のないクラス分けが行われているにもかかわらず、担当者間で十分に成績評価に関する情報交換が行われていなかった、という問題がある。どのように成績評価の情報交換を行い、学生の不利益にならない成績評価を行うか、ということにはデリケートな問題が含まれるため、すぐに取り掛かることはできないのだが、まず問題の所在を見定めることから始めよう、という確認はなされた。

そのほかの点では、ハンドブックの改訂についていくつかの点で意見交換がなされた。主な要望は、①コンテンツを学ぶ意義が分かるような仕組みがほしい、②レポート、プレゼンの見本がほしい、③レポート等の添削を効率的に行う方法を示してほしい、④成績評価についてのサジェッションがほしい、というものである。この課題は、ハンドブック作成チームでの話し合いに持ち越されたが、そのなかで来年度からの新たな試みを通じて、これらの問題に対応していくことが決まった。それは、『大学入門ゼミハンドブック』のなかに「大学入門ゼミFAQ」というコーナーを作るという対応策である。先の要望は、全ての学部から出てきているわけではない。つまり、工夫を凝らしてこれらの問題を解決している学部もあるわけで、本質的に解決不可能な問題ではないのである。また、学部の状況を十分に調査しないで大教センターがレポートやプレゼンのモデルを作成すると、的外れなものになる可能性がある。これらを踏まえて、ハンドブック作成チームは、要するに、各学部が、自分たちが持っている資源を使って問題を解決する手助けをすることが必要なのだ、という結論に達した。「大学入門ゼミFAQ」は、上記のほか、教員アンケートで出されている要望もとりあげ、これに対して、他の学部の担当者が行っている工夫（教員アンケートでは、こういった工夫も書いてもらっている）を、回答として示している。この形式をとることで、各学部の担当者が自分たちの学部の資源を使って問題解決を図る手助けができるはずである。この方策には、当初より放置される傾向にあった教員向けアンケートの有効活用という利点もあり、一石二鳥のアイデアであった。

## 5. 来年度に向けて

先に述べたように、次年度から、「大学入門ゼミ」への初級 PBL 導入がはじまる。その意味は、基本的な課題探求・課題解決型ワークを組み込む、ということであるが、この種のワークはほとんどの「大学入門ゼミ」において行われているため、実質的なタスクは内容の明示化ということであった。とはいえ、「課題探求・課題解決とは何か」、「PBL とはなにか」、「全学共通教育においてそれらを導入するのに適した方法はどのようなものか」という問題が十分に議論されているとはいいがたい。初級 PBL の明確な定義、しかも全ての学部の固有性を殺さないような定義を確立する、ということが必要であろう。この課題は、「大学入門ゼミ」に限定されるものではなく、現在のカリキュラム改革全体に関係するものである。次年度、この問題について調査研究部が議論を深める予定であるが、実施部会を通じて、現場からの意見をそのつど調査研究部に届けていく必要があると思われる。

また、上述のように、今年度の実施部会では、大学入門ゼミにおいて公平な成績評価方法をどのように確立するか、という問題に対して、具体的な方策を提示するには至らなかった。全学的に、クラス分け科目の成績評価方法をどうするか、という議論も始まっているため、成績評価方法の改善も来年度の実施部会の重要な課題の一つとなるであろう。

## 参考文献

- 佐藤慶太 (2011) 「「教養ゼミナール」から「大学入門ゼミ」へ」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第 8 号、27 - 39 頁。
- 佐藤慶太ほか (2012) 「「大学入門ゼミ」本格実施に向けて」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第 9 号、39 - 58 頁。
- 佐藤慶太ほか (2013) 「「大学入門ゼミ」本格実施をむかえて」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第 10 号、101 - 119 頁。
- 佐藤慶太ほか (2014) 「「大学入門ゼミ」実施 2 年目を終えて」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第 11 号、63 - 82 頁。
- 佐藤慶太ほか (2015) 「平成 26 年度「大学入門ゼミ」実施報告」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第 12 号、141 - 152 頁。